
うらのおじいちゃん

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うらのおじいちゃん

【Nコード】

N0362N

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

磯野家の裏に暮らし、穏やかな笑みで子供達を優しく見守り、磯野一家の喧騒から元気を貰ってほのぼの、ノンビリと暮らす一人の老人…裏のおじいちゃん、そんな素敵なおじいちゃんの秘密に迫ります♪

(前書き)

※この小説はキャラ崩壊が著しいだけでなく閲覧に関しては超要注意です(汗)

―フグ田マスオと磯野波平が帰る際、一人の老人と出会う。

「やあやあ、マスオさんに磯野さん…お仕事の帰りですか？」

「これは裏のおじいちゃん。」

「はい、そうです…ん？それは…。」

―それは腹部にまで届く立派なアゴヒゲを蓄えた優しそうな笑顔の老人…裏のおじいちゃんだった。

―磯野家の裏におばあちゃんと一緒に暮らしており、磯野家の喧騒の騒々しさに『磯野さんから元気をもらってる』と笑いながら語り、また、カツオ・ワカメ・タラちゃんを孫の様に可愛がってくれる素敵なおじいちゃんなのだ。

―そのおじいちゃんが自転車を引きながら家に帰る途中なのでマスオが不思議そうに見つめて首を傾げる。

「ホッホッホ…紙芝居じゃよ、昔よくやってましてな…。」

―穏やかな笑い声でニコリと答えてくれた。

「しかし…今の子供はニンテンドーDSやらPSPやらに夢中で紙芝居なんかに興味がないようじゃ…。」

一低い声で寂しそうに呟くおじいちゃん、そりゃそうだ、ゲーム大好きな現代っ子に昔の子供の好きなものが通用するはずがない。

「時代の流れには逆らえませんが…なんだか寂しいのう…。」

「おじいちゃん…。」

一しみりした空気になり、おじいちゃんと波平が暗い顔になる。

「大丈夫ですって！頑張ればいつか子供達も解ってくれますよ！」

「そーかのー…？」

「！？」

一マスオはおじいちゃんを励ますつもりで元気付けした、同時に何故か波平の顔に怒りが現れる。

「マスオ君…キミねえ…安いクチ利いてるんじゃないよ…！！」

「…え？」

一波平は声にドスを利かせながらいきなりマスオの胸倉を乱暴に掴む。

「…おじいちゃんは今でこそ人のいいおじいちゃんだが…ちよつと前ならば『警察』のごやかいになった事も二度や三度じゃきかないくらい気合いの入ったお方なんじゃぞ…！！」

「『警察』…!?!」

—『警察』…しかも相当お世話になったと聞いてマスオは顔を真っ青にして震え上がる…。

「ワシも何年も世話になったが…キサマみたいな青二才がナメたクチを利けるような人じゃないわいッ!!」

「わあ!?!」

—マスオは怒号を上げる波平に突き飛ばされて尻餅をつく…しかし気のせいかやたら波平はテンション高かった。

「フオツフオツ…いいんじやよ…磯野さん。」

「良くないんじやよ! おじいちゃん…そうだ! マスオ君にも『アレ』を見せてやれば…!!」

—おっかない事情があるにも関わらずニコニコと微笑むおじいちゃん…すると波平が何やら気になるワードを言い出したその刹那…!!

「…『アレ』…を…?」

(ヒッ…!?)

「ほんの一瞬だったが…マスオが知るいつものニコニコ顔とは明らかに違う、険しい表情と鋭いまるで殺気が満ちた様な眼光を放つおじいちゃんに気圧されてしまう…」

「フオツフオツ…あんなモノをこんなジジイが見せたところで恥にはなっても自慢にはならんよ…!」

「頼みますよ! マスオ君にも教えてやりたいんですよ! おじいちゃんの『恐ろしさ』をッ!」

「あ…ああ…ああ…!!」

「恥ずかしそうに顔を赤らめ照れながら遠慮するおじいちゃんだが、波平はそれでも尚交渉を続ける…マスオは垣間見たおじいちゃんの『恐ろしさ』(ほんの一部)とやたらに完全に青ざめ始め、太古の化石の様に固まってしまった…」

(今の『眼』は一体…大体見せたいモノってなんなんだ! そしてこのおじいちゃんは何者なんだ!?)

「マスオはイロイロと想像する…銃の所持は当たり前、ヤクザ相手にヤンチャやらかして『千人斬り達成!!』とか叫びながら血が滴り落ちるヤクザの生首を誇らしげに掲げたり…あまりに恐ろしいこの想像だけで小便チビりそうになった…」

「まあ磯野さんに頼まれたならば仕方ないのお…ついてきなされ。」

「ありがとうございます!」

「!!」

—そうこうしてる内に交渉は終わり、おじいちゃんの『アレ』を見せてもらうことになったらしい。

「お：お義父さん：！！もしかして僕はとんでもない事を：！？」

「フッフ：左様、今更後悔しても、もう遅いわ！おじいちゃんの『真の姿』を見て腰を抜かすがよいわ！！」

—波平ですら恐ろしいのか：若干冷や汗をかきながらマスオに威しをかける。

—二人はおじいちゃんの案内でおじいちゃんの家物置小屋に入る…。

「ここじゃよ：ちなみにここはばあさんですら知らん『秘密の場所』じゃ…。」

—おじいちゃんが床下の物を退かすと、なんと、隠し階段があったのだ、二人はおじいちゃんの後に着いてゆき、薄暗い秘密の地下室を下りて行く…。

「こ…これは…！？」

—そこにあつた物を見てマスオが驚愕した…。

「フオッフオッ…ここの棚にあるもの全て…『アダルトビデオ&mp;DVD』じゃよ…」

「ア…アダルトビデオにアダルトDVD!?…ってかいくつあるんだコレ！」

—そう、地下室一面に広がる棚全てにビッシリ何千何万、限りがない勢いで仕舞われてあるもの…おじいちゃんの『アレ』とはアダルトビデオやアダルトDVDのことだった。

「そうじゃ…しかも全て、『裏』!!！」

「えっ!? 『裏』!!！」

「左様。」

—これ全てが裏で流通してる違法、或いは違法スレスレのビデオやDVDばかり、波平の説明にマスオにはただただ驚きの連続である。

「裏のおじいちゃんはなにもワシらの『家の裏に住んでる』からそう呼ばれてるんじゃない…そう! 『裏』マニア歴八十年の男!! 人呼んで『ウラ』のおじいちゃん『なんじゃよ!!』」

「かなり熱の入った波平の説明が嬉しいのか？おじいちゃんは、ニタァ…っと、非常にいやらしい表情を浮かべながら舌なめずりする。

「そんな…じゃあさっきの鋭い眼光は単なるいやらしい目つき…ハッ！？するとお義父さんがお世話になったというのは…！」

「フフフ…母さん達には内緒じゃよ、マスオ君…。」

「なんたる怯え損…そしてまさか波平がおじいちゃんのアダルトコレクションのお世話になったとは…バレたら確実にフネに殺されるだろう。」

「フオッフオツ…最強物忘れは酷くなったが…ココにあるビデオやDVDのタイトルは今でも全て覚えておるよ…！」

「一試しにおじいちゃんは手前の棚を適当に指差す…。」

「ハァ…手前から順に…『とある下半身の超電磁砲』『淫たま乱太郎（略して淫乱）』『絶頂可憐チルドレン』…ハァ…ハァ…！！」

「うう…！」

「完全な助平面で舌なめずりしながら息を荒げ、ズバズバタイトルを言い当てるおじいちゃんにマスオは悪寒を感じて絶句した。

「フフ…まあ人生の全てを『裏』にかけてきたからにはこのくらい当然じゃがな…。」

（とっ…とんでもないジジイだ…！）

—今まで温和で優しいおじいちゃんだと思ってた人物が単なる変態ジジイと知ったからショックは倍増である。

「!?!」

—そしておじいちゃんは突如、スナイパーのごとく鋭い眼光が波平を捉える。

「…磯野さんや、そのフトコロの『痴漢車トーマス』…キッチンと元の場所に戻して下さいよ…。」

「さ…さすがですな…!!」

—どうやら波平がアダルトDVDを一本くすねようとしたらしい、なんたる無駄に優れた眼力か…。

「まあさておき…次はコレクションの中でも自慢の逸品を観せてやろう」

「なんとおッ!?!」

「い…いいんですか!?!」

—おじいちゃんの御好意で波平とマスオは裏試写室にて、おじいちゃんのオススメを観ることになった。

—裏試写室。

『うおお〜!』

『ああああん…!』

一巨大スクリーンいっぱいに映された大画面にて、アダルトDVDを鑑賞…AV男優とAV女優とが生まれたままの姿で嬌声を上げながら×××なことをやっていた。

「行け!そこだ!よし!×しろ!×××するんじゃ!何をしとるんじゃ!一氣に××しろ!××してしまわんか!」

一…さっきまで紙芝居を子供達に見て貰えずに落ち込んでたのが嘘みたいな勢いで、凄まじく興奮しながら歓声を上げていた。

「ファーツハツハツハッハ!×した!×しおったぞ!この男!ファツファツファツ…あー何回見ても面白いのおく…。」

一何がおかしいのやら、笑い泣きしながら食い入る様に画面にしがみつき、おじいちゃんはウツトリする…。

(これがあのさっきまで大人しかったおじいちゃんなのだろうか?なんて生き生きしてるんだ…『裏』にかける愛と情熱がビシバシ伝わってくる…タダで『裏』を見せてくれるし…本当にいい人だな…)

一マスオは波平とアダルトDVDを見つつ、『裏』を愛して止まないおじいちゃんに何か熱いものを感じ、感動さえ覚えた…もつとも『裏』に愛も情熱もクソも無い、それにサザエにバレたらマスオが殺される…。

(ハッ!?情熱…!!)

「マスオはここである『名案』が浮かんだ。」

「おじいちゃん！今のおじいちゃんの情熱を新しい紙芝居作りに傾けたらどうかナッ！？子供達の心を掴む紙芝居が作れるんじゃないですか！？」

「「！？」」

「いきなりの提案におじいちゃんと波平が驚愕する。」

「ワシが！？しかし：新しい紙芝居なんてもう何十年も描いとらんし、自信が…。」

「そんなの関係ないですよ！！まだまだおじいちゃん枯れちゃいないし！やる気になれば出来ますよッ！！」

「マスオの最後の一押しが決め手になったか、おじいちゃんはしばらく考え込み：そして…。」

「そ：…そうかの：よし！冥土の土産に一丁頑張ってみるかのう！？」

「その意気です！身の回りの事は僕らに任せておじいちゃんは紙芝居作りだけに全てを集中させて下さい！！」

「こうしておじいちゃんは新しい紙芝居制作に専念し、制作期間約一週間：その間、マスオと波平による完全バックアップ（お世話なんてせずに『裏』をタダ観してるだけ）の下、ついに新紙芝居は完成した！」

一翌日、児童公園。

「さあー！みんなー！！紙芝居が始まるよー！！」

「みんなおいでー！始まるよー！！」

一おじいちゃんと共に公園にやって来たマスオと波平が子供達に元
気良く呼び掛ける。

「うちのパパやおじいちゃんです。」

「あら本当。」

一たまたま公園で砂山作って遊んでたマスオの息子にして波平の孫・
フグ田タラオと友達のリカちゃんが彼らの存在に気づく。

「今時紙芝居なんて時代遅れもいいところよね？まあ暇潰しに見て
やろうかしら。」

「紙芝居ってアレですよ？下手な絵を見せながらジジイが一人何
役もこなして：馬鹿なジジイの面でも拝んでやるですー。」

一今日日クールな幼児は見事なまでに現代の毒に冒されてた、二人
はおじいちゃんの紙芝居を面白半分な気持ちで見に行った。

「さあ！始まり始まり！！」

「うう…。」

一大勢集まる子供達を前に緊張して震えまくるおじいちゃん、しかし意を決して、最新作の紙芝居の物語を紡ぎ出す…。

「む…昔々…あるところにおじいさんとおばあさんがおりました…。」

「またそれですか？ いい加減マンネリです。」

一昔話の決まり文句にタラちゃんが野次を飛ばした…だが、次の話の節が、紙芝居の世界に新風を吹かせた。

一そしてこの場にいる全員が歴史に残る『伝説の生き証人』になった瞬間が訪れる…！

「おじいさんはおばあさんに跨がり…そして…×××を…。」

一なんと、次の場面の絵には助平面したジジイがいきなり全部脱ぎだし、ババアを裸に剥いて『自主規制』してた、ついでにモザイク処理がされていたりしてる。

「「えええええッ!?!」」

—想定外の展開にマスオと波平は思わずそんな素っ頓狂な声を上げてびっくらこいていた。

「「ワーーーーーッ!!」」

「キャーーーー!?!」

「スゲーーーー!!」

「ウオーーーー!?!」

「えーん…えーん…怖いよー!!」

—反対に子供達には予想外な展開に特に男の子に多かったが、興味津々な歓声、嬉しそうな声が出た、対称的に女の子からは得体の知れないものに泣き声や悲鳴が上がる。

（な…なんてモン作ってんだ! このジジイ!?! 誰が『裏紙芝居』作れなんて言ったアッ!?!）

—開いた口が塞がらないマスオは自分の『裏にかける情熱を紙芝居に傾ける』というアドバイスの意味を完全に履き違えてるおじいちゃんとのトンデモ行動にツツコミを入れまくった。

「お、おじいちゃん…いくらなんでも子供にそれはマズ…アグッ！」

「じゃかアしいッ!!」

一裏紙芝居なんぞ見せるおじいちゃんの行動をマズイと思い、波平が止めに入る…しかし、おじいちゃんが突如、鬼の様な形相になり、波平のアゴにエルボーを荒々しく叩き込み、その口から吐血を噴射させた。

「『裏』ってのは見せればいいんじゃッ!! 話なんか二の次、三の次!! とにかくみんな『放送禁止用語（バキューン!!）』が見たいんじゃ〜!!」

「いいですジジイ!!」

「そうだそうだー!!」

一開き直りに近いおじいちゃんのぶっちゃけ様に、タラちゃんをはじめ子供達はみんなでいつの間にかおじいちゃんに魅せられていた。

「これがオバアの×××じゃー!!」

「ワーワーツ!!」

「えーん…怖いよー…。」

一男女の違いもあり、男は興奮、女は泣き、しかしそれでもみんなおじいちゃんの裏紙芝居に夢中になっていた。

（か、かつて…これほどまでに子供達を熱狂させた紙芝居があっただろうか？ワシは知らない…。）

一殴られたアゴを押さつつ、波平は目の前で起きてるその奇怪な光景をマジマジと見つめていた…っていうか止めろ、孫のタラちゃんもいるんだぞ…。

（…子供達がこんなに喜んでくれている…しかしコレじゃない…こんなモンじゃないんじゃない！ワシが本当に伝えたいモノは…！！）

一齒軋りをしながらおじいちゃんは自分が本当に伝えたいことをやるべきか否か躊躇うが…。

「ええい！ままよッ！！」

一紙芝居の紙を全部一気にスライドさせて引き抜き、『ソレ』の行使を決行した時…おじいちゃんは『生ける伝説』と化した…。

リレングレジェンド

「うおおおおおおお！！」

一…引き抜いた紙芝居の下からなんと…いつの間にか下を脱いでいたおじいちゃんの『いなりずし』が現れた。

「こればかりは完璧に意味不明だったため、一同…沈黙に包まれる…。」

（コ…コレじゃ…ワシが伝えたかったモノは…!!）

一目標を達成させたおじいちゃんはさぞ嬉しそうな表情で涙を流し、シワだらけの渴いた顔を濡らした…次の瞬間。

「そのジジイッ！ガキ相手にそんなモン見せやがって！！ナニ考えてんだッ！？」

「ヒッ…ヒイイイイイ…！？」

一ピッピ―！という笛の音と共に、おじいちゃんの変態行為に怒り心頭の国家権力のイヌ…警察官^{ポリスマン}が現れ、おじいちゃんはびっくりして地面に倒れてしまい、遇えなくオナワとなった…。

「…人のいいおじいさんだと思ってたら…。」

「怖いわねえ…。」

一夕陽をバックに手錠をかけられた、警察官にしょっぱかれるおじいちゃんの後ろ姿を見ながら、紙芝居といなりずしを見た子供達の母親達サザエもいるがヒソヒソと話し込み、汚らしいものを見るような眼を向け、それぞれの我が子に見せない様にした。

（やはりワシは時代遅れということか…。）

「おじいちゃんはもう性も…ではなく精も根も尽き、顔を俯かせながらトボトボ歩くと…。」

「「「ワーーーーーッ！！ジジイー！！」」」

「またやってくれー！！」

「待ってるよー！！」

「戻って来いよー！！」

「こ…子供達ッ！？」

「紙芝居を見てその素晴らしさに感動した子供達からのまさかの熱い声援におじいちゃんの眼から止めどなく涙が溢れ出す…。」

（フフ…いくら時代が変わろうとも…子供達の心は変わらないというコトか…。）

「涙を拭いながらおじいちゃんは言った。」

「ワシはまだやれるんじゃない！こんなモンじゃ終わらんぞーーーーッ！！」

「「「ワーーーーーッ!!」」」

「死ぬまでブチ込んでやる!! 変態ジジイッ!!」

「おじいちゃんは子供や波平達に『必ず復活する』とカムバック宣言をしたのを最後に、パトカーに乗せられ連行されてしまった…。」

（とりあえず…あんなジイサンが捕まって良かった…。）

「…ただ一人、マスオだけはおじいちゃんが逮捕されたのを見てホッとしていた…。」

「尚、これが要因で数年後、『裏』や猥褻物陳列罪のせいでおじいちゃんはおばあちゃんと熟年離婚ならぬ老年離婚をしたという…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0362n/>

うらのおじいちゃん

2010年10月9日03時59分発行